

## 「信仰・希望・愛」の展開の物語

### 第二部 イエスの「神の国」宣教から 弟子たちの「福音書」伝道へ(その1)

イエスの時代のイスラエルの民は、「神の国」の来ることを熱烈に待っていた。メシアを、また終わりの日を、待望していたとも云えるかもしれない。つまり、「主なる神が自分たちを現実に支配される」のを待っていた。イエスは「自分の中に神の支配は来ているのだ。時は満ちた。その福音を信じて、わたしとの親しい交わりを持ち、わたしを通して父なる神に交わる機会を持ちなさい」と云っておられるのに、民衆はそれを悟らず、自分たちと同じ人間であるのに何故イエスが、力と知恵を持つのか？と不思議がり、自分たちの生きる現状がよくなることのみを望んだ。「神の国」は既にイエスの中に来ているが、しかし「神の国」はまだ完成していないので、自分たちの目に見えず、理解することも出来なかった。「イエスご自身の中に神の国の姿がある」のだと認識することが出来なかったのである。

今から、イエスに従って歩き、イエスが民衆に語り、行われた言動が何を示そうとされていたかを見ながら過ごしたペテロに学んだマルコの「福音書」から引用して「神の国の福音」と彼が受け取った事例を、共に調べましょう。すべての事例はひけない。但し、引用しました聖書に記載された記事は、必ず自分で聖書のその箇所を開いてお読み下さい。

#### 安息日の論争(マルコ2章23～28節)

「安息日を覚えて、これを聖とせよ」と云う規定は、ユダヤ教の律法の中で最も根本的な律法であり「(モーセの十戒)中の一つである、『殺してはならない』と云う律法と同じ重さを持ち、これを侵すものは死刑にされると規定されている(出エジプト31:12～17)。この律法は律法学者によって、後年多くの細かい付属規定が生み出される。「安息日にしてはならない事」の規定は300にもなるが、その1例を上げると、(安息日には2000キューピット(900メートル)以上の距離は歩いてはけない』と云う規定がある)。イエスと弟子たちはこの2000キューピット規定違反を突かれたのではない。麦の穂を摘むことは収穫作業であるから律法違反であると問題にされた。イエスが反論としてダビデの行為を挙げられたのは、もっと根本的な問題、律法の存在理由そのものを論じる為である。一人人間にとって、律法とは何であるのか。「安息日は人の為にあるもので、人が安息日の為にあるのではない」とイエスは喝破される。エジプトからイスラエルが脱出したのは、すべてヤハウエの恩恵によるのであって、イスラエルの民自体の力によるのではない。「ヤハウエは6日のうちに、天と地と海と、その中のすべてに完成することをほめたたえる日です。神はそのように、人間が神の前に自分の存在を喜び祝う日として安息日を定められた。イスラエルの民が神の民となったのは、民たちに選ばれる価値があったからではなく、神がイスラエルを選ばれたからである。ただ神の働きによって民は解放されたのです。すなわち人間と神の関係は、ひたすら神からの恩恵に基づいている。

このような状況の下で、イエスの「安息日は人のためにあるので、神が安息日の為にあるのではない」と云うイエスの言葉は律法の中ではまさに革新的である。イエスの中では既に安息日が成就している。律法を守ることはもはや必要ではなく、それとは別に、賜った聖霊により神との

交わりが実現しているイエスの中では、創造・贖い・救いの完成の祝祭が既に祝われている。聖霊によりイエスの中に到来している「神の支配」の現実、律法の細則遵守を要求するユダヤ教に対する批判とならざるを得ない。

「このように、人の子は安息日にもまた主なのである」。

イエスはこのように終わりの日に出現する新しい人間を先取りし代表する者として、ご自分を「人の子」と呼ばれる。「人の子イエス」は聖霊による神との交わりの中ですでに、「安息日の主」になっておられる。これはイエスだけのことではない。今やイエス・キリストによって購われ、同じ聖霊の現実生きるようになる新しい人間すべてに成就するのです。今や人間は、創造と贖いと完成の喜びの祝祭である安息日を毎日祝っているのです。人間は安息日に主人となったのです。どのようにしてか？

キリスト教会はユダヤ教の安息日(土曜日)を廃して、イエスが復活された週の第一日(日曜日)を主日としたのである。再び律法に捕らわれず、イエスの聖霊に従うようにしよう。

### 「種を蒔く人の譬え」(マルコ4章1～9節)以下

この譬を理解する上で大切な前提は、聖書では「刈り入れ」とか「収穫」はいつも終末的な時を指し示す比喩であると云う事実である。終末とは厳しい選別と審判の時であるが、同時に喜びに満ちた栄光が顕れる時でもある(イザヤ9；3・マタイ3：2など)。この譬えでは「刈り入れ」とか「収穫」とかは文章の中に出てこないが、種蒔きの状況との対比で、収穫が主題になっていることは明らかである。「神の国」到来の使信が響き渡っている。

イエスはこの所で「神の国」到来の原理を語っておられる。すなわち、神はこの地上に栄光の種子を蒔かれた。この種は人間の不信や頑なさの中で失われてしまったように見えるが、それが神の種子である以上、その栄光は時が来れば必ず顕れるのである。イエスはその原理だけを語って、具体的な内容は聞くものひとりひとりの状況に応じて聞くように、聞く者一人一人に解釈を委ねられる。「耳ある者は聞くがよい」。今 福音を信じキリストにあって生きる者は、どのように聞き取るべきか？

**三重の内容** 第一の内容は、イエスの出現によってイスラエルの歴史の中での神の支配が成就し、今「神の国」が来ている。救いの時が臨んでいるという喜びの告示である。「時は満ちた」と云う告知を譬えの形で示しておられる。神は世界に「神の国」と云う収穫をもたらす為に、まずイスラエルの民を選び、種を蒔かれた。所がイスラエルの民の不信と傲慢によって、蒔かれた種は大半悪い土地に落ちて、失われてしまったように思われた。がその悪い状況の中で、神は預言者たちを起こして御言葉と御業を保存し、来るべき時に備えられた。そして、今やイエスの働きの中に、イスラエルに備えられたすべての約束は成就し、「神の国」は到来している。この成就の喜びが「種蒔きの譬え」の中に響き渡っている。

第二に、この譬えは現在のイエスの「神の国」宣教の働きと、やがて顕れようとしている栄光との対照を語る譬えとして理解できる。イエスは聖霊によって既に「神の国」の現実をご自分の中に宿してそれを宣べ伝えておられるが、その宣教は不信と敵意に囲まれて、世界に「神の国」が現れる気配はない。かえってイエスの意図は敵視され、迫害されてご自分が死に至ることを知っておられる。種は多くは悪い土地に落ちて失われるのである。けれどもそれは神の種であるから、信じる者がいかに少なくても、時が来れば必ず、神の支配の栄光が溢れるのである。今イエ

スの蒔いておられるわざと言葉とは、たとえ今は敵意の中に埋もれ隠れていても、すぐに豊かな神の栄光となって輝き出ることになる。

この第一と第二の譬えの「理解」は、イエスの「神の国」宣教の二重性に対応している。イエスの宣教には、「神の国」が既に到来しているという面と、将来すぐに顕れようとしているという両面がある。この両面の緊張に満ちた関わり方にイエスの「神の国」宣教の特色がある。しかし、神の蒔かれた種は、いかに人間の不信や敵意の中に失われたように見えても、必ず豊かな実を結び、輝かしい「神の国」が現れるのです。

第三に、この譬えは、人間が死に定められている現実と、神が与えて下さる復活との対照を示す譬えとしても理解することが出来る。福音を信じて復活者キリストに結ばれて生きる者は、聖霊によって神からの新しいいのちを受けている。ところが人間の生命は生まれながらの人間本性に巢食う罪の為に、その体は死に定められている。神からの新しいいのちは、本性的に神に逆らう古い人間性の中に閉じ込められ、覆い隠されている。しかしそれが神からのいのちである以上、必ず豊かな栄光の中に花開くのである。それが復活である。神はご自身に属する者たちに、神からの新しい生命にふさわしい別の体を与えようとしておられる。キリストに属する者は、イエスが復活されたように、「霊の体」を与えられて死人の中から復活する。それは今キリストにあって神の中に隠されているいのちが顕現する時である(コロサイ3；3～4)。使徒パウロは「どんな体で復活するのか」と云う問いに対して、

**「愚かな人である。あなたの蒔くものは、死ななければ、生かされないではないか。中略・・・神はみ心のままにこれに体を与え、その一つ一つの種にそれぞれのからだをお与えになる」**(

I コリント15；36～38)。

そしてイエスは「よくよくあなた方に言うておく。「一粒の種が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒の種だけである。もし死んだら、豊かな実を結ぶようになる」(ヨハネ12；24)と云っておられる。

復活こそ「神の国」の最終的な内容です。「種蒔き」の譬えによって「隠されているもので顕れないものはない」という「神の支配」の根本原理を示し、それによって「神の国」の最終的な内容である将来の「復活」の確かさを指示しておられる。この終末的な「神の国」到来の原理が「種蒔きの譬え」で語られているのです。

## 第2部 イエスの「神の国」宣教から、弟子たちも「福音書」伝道へ(その2)

### 「苦しみを受ける人の子」(マルコ8章；27～33節)

勿論イエスの苦難は生後早くから始まっています。「イエスの神の国宣教の旅」の中でどれだけ、泊る所、食べる事、沢山の民衆の苦しみに関わり助けることに心身を悩まされたか分かりません。にも拘らず、身勝手な民たちは自分たちの利益になることだけを願って、イエスを少しも理解できなかつた。このイエスへの理解の欠如こそ民衆たちの最大の欠点であるのに。イエスの民への愛と苦しみを思います。それにつけても、現代社会に最も大切な『キリストの平和』が、キリスト・イエスの十字架と復活にも関わらず、現代の私たち信徒にも十分理解されていないことは、悲しいことです。思わぬ感慨を失礼。

所でイエスがご自分の死に至る受難を弟子たちに話し始められたのは、弟子たちに「あなたたちは私を誰だと思うのか」と質問され、ペテロが弟子たちの代表のように「あなたはメシアです」と告白した時から始まります。その時イエスは他言することを固く禁じた上『人の子は必ず多くの苦しみを受け、殺され、3日の後に復活する』ことを教え始められます。弟子たちはびっくり仰天します。ペテロはイエスを脇の方に連れ出して「メシアがそんなことを言うてはいけません」と云って、イエスに「サタンよ、退け。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている」と激しく叱られるし、その後もゼベダイの子ヤコブとヨハネの母が「あなたが栄光をお受けになる時、二人の子供をあなたの左右に座らせて下さい」と云って、イエスに『人の子は仕えられる為ではなく仕える為に、また多くの人の為の身代金として自分の命を献げるために来たのである』(マルコ10;45)と諭されています。このようにイエスに危急が迫っているというのに、まだイエスの「受難のメシア」の本質=第二イザヤ的《ダビデ的ではなく》メシアは、弟子たちにも理解できていなかった。

人の子に戻りましょう。「人の子」はイエスが言い始められた言葉ではありません。旧約聖書で預言者が再々用いています。一番用いられる文章はダニエル書に「4つの獣に象徴される世界帝国の支配者たち(世界の滅亡に瀕している状態を表わす)と云う表現の後に、「人の子のようなもの」が神から遣わされ永遠の支配権を与えられて世界に救いが来るといふ、終末の光景が語られています。そのダニエル書の記載以後、「人の子」は世の終末に天から遣わされる超自然的な審判者、支配者を指す称号として用いられるようになります。福音書が「人の子が苦しみを受け、殺される」と云う言葉をイエスの言葉として伝承する時、マルコ福音書が、受難物語の主であるイエス、復活者キリスト、の栄光ある出来事であるとして示しているのです。マルコは「人の子は必ず苦しみを受け、殺され、三日の後に復活する」と云うイエスの言葉を(ホ・ロゴス)=み言葉と呼んでいます。(8;32)。マルコはこのイエスの言葉こそ福音だと云っているのです。だから、イエスのご復活以後は、「人の子」はイエスの称号となり、外の人には用いられません。この言葉は、イエスがエルサレムに着かれるまでにあと二度「私が復活するまで人に話してはならない」と云う厳命と共に、弟子たちに話されます。そしてイエスは群衆の歓呼に迎えられてエルサレムに入って行かれます。それから過ぎ越しの祭りの夜、最後の晩餐(イエスのからだを血として、パンと葡萄酒を弟子たちに与えられた)。今日私たちが頂く聖餐の意味を深く考えたいと思う、マタイには、「これは、罪が赦されるように多くの人の為に流されるわたしの血、契約の血である」と詳しく説明されています。続いてゲッセマネの祈り、イエスの裁判(ここで重要なことは、方々引き回され、色々な非難と質問の上に)、大祭司が「お前はほむべき方の子、メシアなのか」と問うたのに対し、イエスは「わたしはある《エゴ・エイミ》=そうだ。私は神の子メシアである」と答えられたことです。この(エゴ・エイミ)は、神がご自身を顕される時に、みずからを名乗られる言葉です。これまでの裁判の経過においても、イエスの心身の苦しみは大変な事だったと思われそうですが、ここではその頂点と思われる十字架刑での主の苦しみのことに触れたいと思います。

## 十字架の苦しみ

十字架が人間の言葉では表現できない程の苦しみであることは、おもに肉体的苦痛に関しての

み考えると、人間の私たちにも想像できると思います。けれども当時ローマ支配下の国々では重罪の人間の死刑には普通に用いられていました。そ湖で理解できるのは肉体的苦痛だけです、イエスの苦しみの痛烈さは？ 「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と云う悲痛なイエスの訴えが聖書に記載されていますが、《わたしの神よ、わたしの神よ、何故わたしをお見捨てになるのか、何故わたしを遠く離れ、救おうともせず…後略》と云うあの詩編第22編(全部を是非お読みいただくように希望します)の初めの言葉を読んで、イエスが同詩編の全体を覆っている神への信頼と平安を願うとされたという見解もありますが、イエスは単なる殉教者ではなく、イエス様はゲッセマネで苦難の杯を飲み干しておられるのです。だから、私は到底その解釈を肯定できないと感じています。あの十字架上のイエスは、神の子であることを放棄して罪にまみれた一人の人間として父の神から実際に見捨てられておられるのです。神の裁きの下で、真っ暗な死の中に突き落とされ、絶望の極に立たされておられるのです。この叫びは、霊を含む全存在の滅びの下にある人間の叫びを、イエスが、人間に代わって叫んでおられるのだ、と云う市川師の解釈に心を打たれます。「キリストが私たちの罪の為に死なれた」と云う福音の本質からは、この見方しかないと考えます。

イエス・キリストとのこの出会いによって「死から救い出された」私たちはしかし、自分が冷えているという悩みを、偽りのない兄弟愛に欠けていると云う苦しみを、私たちに二心のあることの悲しみを、知っています。だから、自分たちの祈りに添えて、聖霊が言い表せぬうめきを以て祈っていて下さることを頼みとしています。そして、偽りのない兄弟愛と、喜びの満ち溢れる、主キリストを頭とする教会を創れと「十字架」と「復活」によって語られる**神様のみ言葉**＝「イエス・キリスト」に聞き従おうとするのです。

### 「キリスト・イエス」に従う(マルコ8章34節～9章1節)

**わたしの後に従いたい者は自分を捨て、自分の十字架を背負って私に従って来なさい**

弟子たちに苦難の道を進むご自分を示されたイエスは、弟子たちにも苦難の道を進む覚悟を求められる。「従うとはどのような事」かを具体的に初めて弟子たちに示された。弟子たちはいつもイエスと一緒にいて、その言葉の権威と力ある業に圧倒され、漸く、イエスがメシアであると確信した。がその確信はイスラエルを回復し、王としての栄光をこの世に顕されるメシアとしての姿であって、この現世の支配者に殺されるメシアではなかった。「自分を捨て」或いは「自分を否定して」とかいう言葉で「十字架を背負って」の内容が表現されている。「自分の十字架を背負う」と云う表現は、しかし十字架の殉教を指しているのではない。十字架の木を担って、同胞の侮蔑と敵意の中を歩んで行く姿を指している。「**イエスに従う**」とはこのように「**自分の十字架を背負う**」生涯に入って行くことです。このような生涯を受け入れる覚悟を持たない者は、イエスについて行くことは出来ない。

自分の力で獲得できるものによって、自分の命を保ち豊かになろうとする者は、結局はその命を失う。それに反してイエスに従う者として、イエスの為に命を捨て自分を否定する者はイエスに見習って自分を神に投げ出して行くのである。そのような者は神から真実の命を頂く。それがその人にとっての「永遠のいのち」である。「わたしの為に」とイエスが言われるのは、当時の迫

害の状況の中で、具体的にはイエス・キリストの福音を告白することを意味していた。次に、「人は全世界を獲得しても自分が死者の中からの復活に達しなければ、その人の人生に何の意味があるのだろうか？」死よりの復活を得たならば、その人の人生は勝利に終わったのである。終末信仰とは人間の現在の命を賭けた事象なのだ。

このようにマルコ福音書のこの場所の意味は、迫害や苦難や他人の軽侮の中で、イエスを信じ告白することにより栄光に与るように励ますという面を持っている。けれどそれに留まるものではない。信仰とは何かと云う根本的な問題について、マルコの使信となっている、「**イエスを信じる**」とは「**イエスに従う**」事である。イエスと一緒に歩くことによって、イエスが与えられる苦しみを共に受け、その中で自分を捨て、自分が死ぬのである。このように自分の命を失うことによってイエスと共に復活に至る命に生きること、これが「**イエスに従う**」ことである。「**イエスを信じる**」とはこれ以下のことではない。ここでマルコが語っている信仰は、パウロが「**わたしはキリストと共に十字架につけられている。生きているのは、もはやわたしではない、キリストが私の中に生きておられるのである**」と(ガラテヤ書2 ; 19~20)で告白している信仰と同じである。「**イエス・キリスト**」を信じるとか、「**福音**」を信じるとは、このような事態のことです。これがキリスト信仰の奥義です。マルコはこれを弟子たちだけでなく、福音を信仰する者たちへの言葉とするために、「**弟子たちと共に群衆を呼び集め**」と云う編集句を加えたのでしょう。と云うわけで、次からはパウロの「福音」伝道について考えたいと思っています。今回の私の記述は、市川喜一師の「マルコ福音書講解」また「神の信に生きる」より、殆ど字句通りに書かせて頂きました。私の心を代弁する師の表現で、これ以上の解説は私にはできませんので、ご本の表現をお借りしました。心から感謝とお詫びを申し上げます。